**<!doctype html public "-//w3c//dtd html 4.0 transitional//en">ヨーク大学日本語科三学年読解教材**
**構文と演習：「コンピューター」**

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

［構文］

**①　．．．といって（も）よいほど　．．．**

1. 以前は「は力なり」だったのが、最近は「コンピューターは力なり」といってもよいほどコンピューターのがしてきたように思う。
2. の若者は、ほとんどといってよいほど読書をしないようである。
3. 彼女はといってもよいほど語学にである。

**②　．．．か　．．．ないかによって　．．．**

1. コンピューターに関して知っているか知らないかによって、仕事の、、また・がまったくってくる。
2. が出るか出ないかによってこのプロジェクトのが決まる。
3. フロリダで読みが始まるか始まらないかによってが決まる。

**③　．．．にはり知れないものがある。**

1. コンピューターの場合には特にそのの大きさと広さには計り知れないものがある。
2. 現代ののには計り知れないものがある。
3. ののがにぼすには計り知れないものがある。

**④　（かに）．．．（という）きらいもないではない**

1. 確かにコンピューターにりされているきらいもないではない。
2. 確かににされているというきらいもないではないが、もう少ししてみよう。
3. あのには、「をたたいてる」というような過ぎるきらいもないではないが、はあると思う。

**⑤　．．．（という点）もめない**

1. コンピューターのおかげでよく仕事が出来るために、もっと仕事の量が増えたという点も否めない。
2. 青少年に対するが軽いために、若者による犯罪が増えたことも否めない。
3. あの二人がこんなに早くするにったには、のがになっていることも否めない。

**⑥　．．．（て）初めて　．．．**

1. 十年以上のがあって初めて、現在のコンピューターが使いこなせるのである。
2. 色々な国に住んでみて初めて自分の国のさが分かるものです。
3. 自分の子供を持ってみて初めて、親のが分かったと言える。

**⑦　むと好まざるとにわらず　．．．**

1. 好むと好まざるとに関わらず、コンピューター化はどんどん進み、どこかで始めなければ、に取りされてしまう。
2. 好むと好まざるとに関わらず、にとってリストラによるがのである。
3. 好むと好まざるとに関わらず、このをけれなければ、がはっられてしまうれがある。

**⑧　．．．（するなら）ば、どうして　．．．か**

1. 大学人がいつまでもとした「の」にこもって、アカデミアのをろうとするならば、どうして新しい時代にできる若いをしていくことが出来るか。
2. このを通さなければ、どうしてをうことができるか。
3. 自国で起きている問題をするならば、どうして他国の人権問題をできるか。

**⑨　（いくら）．．．（だ）からといって　。。。（する）のは　．．．**

1. いくらユーザー・フレンドリーになったからといって、に使えるようになると考えるのは大間違いである。
2. いくら若いからといって毎晩をするのは身体にだよ。
3. いくらな相手が見つからないからといって、あんなと結婚するのはやめた方がいいよ。

**⑩　．．．（で）あろうと　．．．（で）あろうと　．．．（であれ）ば　．．．**

1. 相手がであろうと何であろうと、コンピューターにであれば、そのようにう。
2. 男性であろうと女性であろうと、仕事さえよく出来れば、する。
3. であろうと文学であろうと、おまえがやりたいならば、何でもしていいよ。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

**［演習］**

I．次の質問に答えなさい。

１．「コンピューターは力なり」とはどういうことですか。

２．「の」をに説明しなさい。

３．コンピューター利用のをべなさい。

４．筆者はなぜ「コンピューター」にかかっている人たちをあながち

　　められないと言っていますか。

５．コンピューター化と大学教育に関して筆者はどのように考えていますか。

６．コンピューターを学ぶことにおける「とし」とはどういうことです

　　か。

７．「だにしない」を簡単に説明しなさい。

８．コンピューター関係ののについて筆者はどのように考え

　　ていますか。

９．筆者は、コンピューター教員の役割をどう見ていますか。

II.　この文章の中心的な主題は何でしょうか。

III．あなた自身のコンピューターに関する経験を皆で話し合ってみなさい。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

©　Norio Ota 2006